日本医療機能評価機構認定病院
那珂川病院だより
VOL.52 平成24年9月
〒811-1345 福岡市南区向新町2丁目17-17
TEL.092-565-3531（代）
FAX.092-566-6460
http://www.nakagawa-hp.com
（携帯電話でもご覧いただけます）

病院理念 ― 思いやりそして努力　奉仕そしてよろこび

公益に資する病院として

副院長　吉村 寛志

4年に1度のスポーツと平和の祭典であるロンドンオリンピックが幕を閉じました。今回の大会で日本は過去最多のメダルを獲得し、多くの選手が活躍しましたが、中でも団体競技が印象的でした。サッカー、水泳リレー、男子体操、女子バレーなどでは、特に大きな感動を与えてもらいました。また、表彰式で君が代が流れ日の丸が掲揚される映像を見ると、オリンピックは単にスポーツを楽しむだけでなく、国家や民族を意識させる場であることが再認識できました。

「個」よりも「全体」を重んじ、「私」よりも「公」を尊ぶ私としては、睡眠不足になりながらも心地よい愛国心に浸ることのできた2週間でした。その後、日本の領土のことで何やら騒がしいことになってはいますが、政治家やメディアは、国家観を持って国益を考えた行動をとって欲しいものです。

領土同様、国家に十分守られているとは言い難い医療の場においては、医療に携わるものが確かな医療観を持ち、医療における公益を考えて行動する必要があるでしょう。これからの医療機関に求められる重要なキーワードの1つは公益性ではないでしょうか。当院は公立病院ではありませんが、平成22年4月に社会医療法人の認定を受けており、これまで以上に公益性を高めて行くことが求められていると思います。そのためにまず基本となるのは診療の質の向上です。患者さんに安全性、客観性、透明性の高い診療を提供できるよう、医師のみならずコメディカルスタッフ各自の研鑽はもちろん、カンファレンスや院内研修会を通じて、チームとしてレベルアップを図る努力をしています。

さざんか

診療内容に関しましては、当院は一般急性期・回復期・緩和医療を中心として行っていますが、社会医療法人として認定を受ける要件の1つになっている救急医療の充実はもちろん、在宅医療や健診業務など、幅広く地域のニーズに応えるべく業務の拡充を進めています。もちろん当院で対応できない領域も多くありますので、周辺の医療機関との連携が不可欠です。当院で提供できる医療とできない医療の見極めを謙虚に行い、公的基幹病院や開業医の先生方との病病連携、病診連携を密にして、この地域における当院の役割を果たしていきたいと考えています。

また、診療以外の取り組みの1つとして、地域の皆様への健康に関する情報発信があります。今年1月から月に1回、那珂川病院健康教室を開催しています。また、しばらく休止していた糖尿病教室も、7月から再開いたしました。当院を身近に感じていただくとともに、健康についての意識向上に役立てていただければ幸いです。その他に、当院は環瀬戸内自然免疫ネットワークや足もと健康サポートねっとなどの、医療関連のNPO法人との連携にも積極的に取り組んでいます。

環瀬戸内自然免疫ネットワークは、「健康維持は自然免疫の活性化から」をコンセプトとし、自然免疫の役割や重要性についての情報発信や自然免疫を活性化する技術の普及を目的として活動しています。当院は連携医療施設として、機能性食品などの効果実証試験の実施や自然免疫賦活物質の臨床応用に向けた取り組みを行っています。足もと健康サポートねっとは、医療従事者と靴業界・フットケアサロン業界との連携を図り、足の健康をトータルにサポートする活動を行っています。当院では、「那珂川フットケアミーティング」を定期的に開催するなど、同法人と連携して足の健康に関する医療に取り組んでいます。

当院では、常に地域・社会への貢献を意識した医療が提供できるよう心がけています。まだまだ改善すべきところは多々ありますが、地域の皆様から信頼され、公益に資する医療機関として認めていただけるよう、下川院長のもと、職員一同努力を続けて行きたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

緩和ケアのお世話になって

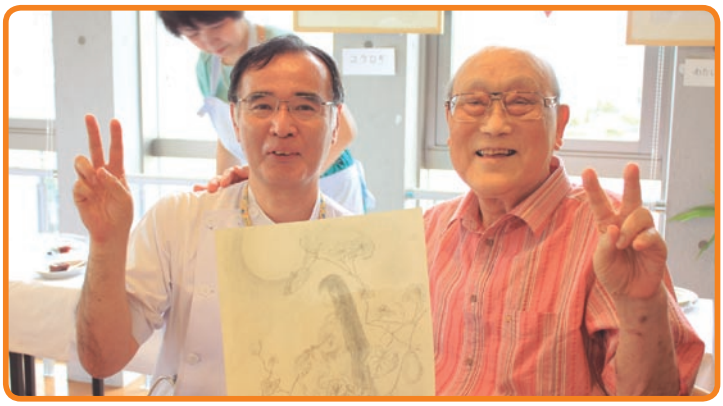
小倉 満洲男

緩和ケア406番地の小倉でご座居ます。「緩和ケア」って何？　今まで耳慣れない言葉に初めは戸惑ったものでした。気が付いてみると既に8カ月以上ここにお世話になっていたのには驚きです。自分では4～5カ月ほどしか経っていない感覚だからです。答えは直ぐに出ました。ただただ楽しい毎日だったからです。本人をはじめ家族は、専門の先生方、スタッフの方々に大安心で全てをお任せして居ります。補助をされる専門のボランティアの心こもった細心のケア、優良な施設での毎日のリハビリ・介護も、見逃せない大切な要因の一つです。特に心理療法、音楽療法など今まで経験した事のない体験はすばらしく新しい発見でした。

その人らしい生活の送り方が自然に出来ることこそ最良なわけですが、ではどうすればよいのか？　むずかしく考える必要はなく、「常に明るく、前を向いた気持ちで毎日を楽しく過ごすこと」だと思います。自分の趣味やら、友との語らい、その中での自分らしさの発見が、今一番求められているのではないでしょうか。私の場合、大変幸運でした。

新しい良い友に巡り会い、今まで知らなかった新しい事柄、新しい知識は、正に人生の宝といえるものでした。この様な生活の中で、考えてもいなかった「えんぴつ画」の個展を皆様のお力添えで開くことができ、またオークションにまで発展することが出来ました。この様な楽しい企画が次から次へと計画され、近々、私の好きなハーモニカとピアノ共演もする事となりました。

人生に前向きに明るい毎日を送る事が色々な楽しいチャンスを生み、また次の楽しい日々に続いていくものと考えます。ひいては医学的にNK細胞の活性化を招き、本来生物の持つ自然免疫の強化へとつながっていくものと考えて居ります。　皆様〝**楽しい毎日を送りましょう！**〟



※小倉さんは、このように病棟で「命を輝かせて」過ごしておられました。その後、この那珂川病院だよりの発刊を待たず、誠に残念ですが、平成24年8月29日永眠されました。ここに追悼の意を表します。

緩和ケア担当医　原口　勝

音楽療法を始めたきっかけ

音楽療法士　嶺 俊之

私は幼いころから音楽をやっていました。また動物や植物といった生き物を飼育するのもとても好きでした。だから生き物に対して音楽を使ってのアプローチを行うことにより、どのような変化が起こるのか非常に興味を持っていました。当時からテレビ番組や書籍で、音楽を聞かせることにより牛のミルクの出がよくなったり、ブドウの甘みが増すといった実験の成果が報告されていました。そこで自分も興味のある音楽療法を実際にやってみたいと思い、この仕事を始めることにしました。

※嶺さんは、バイオリンで音楽療法を行っています。毎週火曜日と木曜日に来てくれます。患者さんやご家族との合奏も歓迎します。

「緩和ケア病棟における看護師の役割」

末松 しのぶ

私は緩和ケア病棟に配属になり、5年が過ぎようとしています。今回、原稿の依頼を受け、改めてこの5年間を振り返りました。沢山の患者さん、ご家族との出会いがある中、「生きているだけで丸儲け」と話す50歳代の女性がおられました。娘さんが結婚10年目にしてやっと授かった子供さんを抱きながら、口にした病室での一言でした。そして、「この世に自分が生を与えられた事に感謝。子供・孫が産まれて来てくれた事にも感謝。私の生を子供・孫に見せることが出来るこの病気になった事にも感謝」と話しておられました。

病気が発見され、辛い治療を経て、自らのいのちと向き合い、あらゆる苦痛から解放されたその穏やかなほほ笑みは、とても美しいものでした。そして今を大切に生きるという事を教えていただきました。

看護師はいのちと向き合う職種です。それは緩和ケアに限らないことです。忙しい毎日の中でその大切な役割を見失いそうになることもあります。患者さん、ご家族が看護師に求めている事は何か。その人らしさを重んじた対応ができているのか。いのちと向き合うとはどういうことか。私は一人でも多くこの女性のような穏やかなほほ笑みに出会いたいと願います。

患者さんやご家族と真剣に向き合い、沢山のお話をいただく事に感謝し、共に泣き笑いできる存在でありたい。それが看護師の役割だと考えています。

緩和ケア病棟基本方針

1. 患者さん、ご家族に寄り添い、信頼される質の高いケアを提供する。
2. スタッフ一人一人が役割を自覚し、個々の良さを充分発揮できる。
3. チーム一丸となり、助け合い、認め合い、共に考える環境をつくる。

緩和ケア病棟の目標

1. 患者さんに苦痛がなく、持てる力を信じ、サポートする。
2. 患者さん、ご家族の思いに心を傾け、寄り添える。
3. 患者さんの生活環境への気配り、人生の振り返りができる。

新任医師の紹介

社会医療法人喜悦会　那珂川病院 整形外科　横山 良平

今年4月より那珂川病院整形外科に勤務しています。1981年に九大医学部を卒業後31年が過ぎましたが、大学院、国立がんセンター、九州がんセンターと25年以上を整形外科領域のがん、すなわち骨軟部腫瘍の診療と研究に費やしてきました。実に20数年ぶりに一般整形外科の現場に立ち、不安を感じながらのスタートでしたが、何とか日々大過なく過ごしています。

これまでの経験をよりプライマリケアの現場に近い当院で生かしたいと考えています。骨腫瘍はレントゲンの異常から診断がつくことが大半ですし、軟部腫瘍はからだの表面からしこりとして気がつくことがほとんどです。このような場合に、がんセンターを紹介すべきか迷われた場合には、気軽にご相談いただければと思います。

個人的なことを申し上げると、元来無趣味で、暇なときは読書をしたり、とりとめないことを考えたりして時間をつぶし、気が向けば近隣の山を歩くと云った具合です。活動的な医師が多い整形外科医の中では、これまた変人かもしれません。

経歴、趣味とも一般の整形外科医とは少々毛色が違う人間ですが、ご厚情を賜れれば幸いです。

社会医療法人喜悦会　那珂川病院 整形外科　溝上 浩士

この度、那珂川病院にて勤務する事となりました整形外科の溝上です。整形外科専門医で、日整会スポーツ認定医、リウマチ認定医でもあります。

山口大学の卒業で、当院の下川院長先生の後輩です。数年前に大学の同窓会で院長に出会ったのが、ここに赴任するきっかけとなりました。尚、高校は福岡高校卒です。大学卒業後、山大の整形外科の医局員として山口（最後は島根県立中央病院）で勤務しておりました。7年ほど前、家庭の事情にて、山大でフリーエージェント宣言？　をして、福岡に帰ってまいりました。股関節が専門の筈でしたが、赴任先は救急病院が多く、外傷がメインで仕事をしておりました。

当院にはMRIやマルチCTもあり、新しい手術室もあり、整形外科医として働きやすい環境です。

以上、まとまりのない文ですいませんが、自己紹介とさせていただきます。

今後とも宜しくお願い申し上げます。

新任医師の紹介

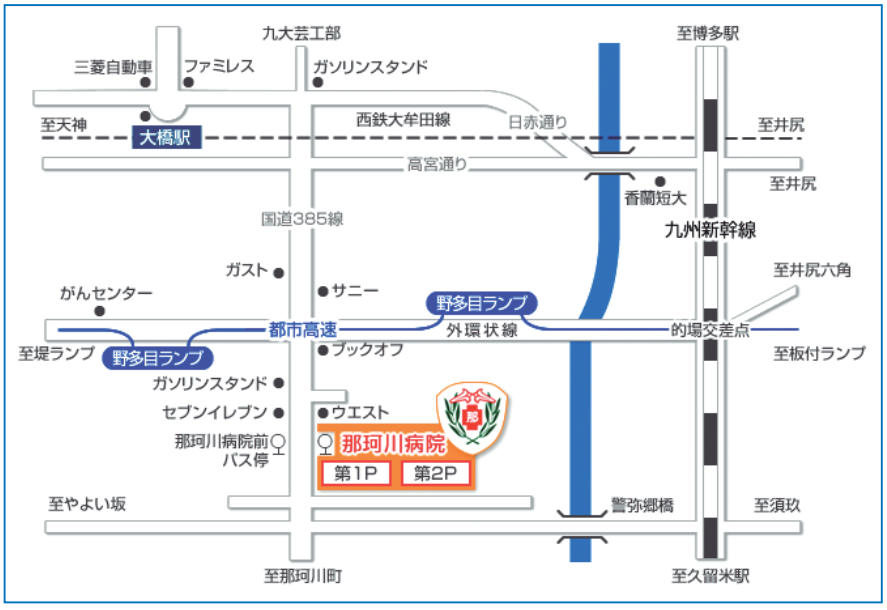
社会医療法人喜悦会　那珂川病院
緩和ケア科医師（浄土真宗本願寺派真教寺　副住職）　月江 教昭

医療従事者は、患者・家族に何を求められ、何を提供し得ているのだろうか。当面、患者・家族の求めは、「病の治癒」または、「いつまでも健康で、長生き出来ること」を願われ、さしあたって、我々は、それに応えることを求められている。それは、医学という名の科学の提供であり、科学的命題としての生命に寄り添っていることにほかならない。

しかし、医療という臨床の現場では、本当にそれだけを求められているのであろうか。那珂川病院は、リハビリが盛んな病院のようだ。時折、病院内外でリハビリの屋外歩行訓練の光景や笑い声が響き渡る光景をお目見えする。単に、科学的命題としての生命のみに寄り添うことだけを求められているのであれば、不要な光景であろう。しかしながら、その光景はなんとも微笑ましい。それは、我々医療従事者が、単に「科学的命題としての生命」を支えることだけを求められているわけではなく、「価値的命題としてのいのち」も支えることを望まれていることにほかならない。

アルベルト・アインシュタイン（Albert Einstein）はその著書『私の世界観（World as I see it）』において、「宗教のない科学は不具であり、科学のない宗教は盲目である。（Science without religion is lame, religion without science is blind.）」と述べている。

医学という名の科学だけでは、その「いのちの価値」に寄り添うことが難しいのも、また事実であろう。医師として、また、僧侶として、その両方からいのちを支えるお世話（ケア）が出来ればと思っております。



【交通】西鉄バス系統番号4番・47番・62番・620番「那珂川病院前」下車すぐ　■駐車場150台

常勤医師診療担当表

医師名	担当領域
下川　敏弘	消化器外科、呼吸器外科、透析
大国　貴史	消化器外科、透析、漢方
古賀　健資	消化器外科、呼吸器外科
吉村　寛志	大腸・肛門外科、消化器外科
宮脇　龍一郎	循環器内科
筒井　伸一	消化器内科
大内田　敏行	放射線科
片桐　邦彦	脳神経外科
金宮　八重子	脳神経外科
原口　勝	緩和医療
古賀　善彦	リハビリテーション科（回復期）
熊澤　浩明	外科
福永　昌幸	麻酔科・外科・救急
竹内　一馬	血管外科・循環器内科
横山　良平	整形外科
月江　教昭	緩和医療・内科
溝上　浩士	整形外科

平成24年9月1日現在